

山形県における人材育成の取組について

山形県置賜総合支庁産業経済部農村計画課

高橋 信博

棚田保全からはじまる地域づくり

“一村一〇運動のイメージ（事例の紹介）”



●榎平の棚田について

山形県朝日町は、町全体をエコミュージアム（生活環境博物館）と位置付け、町民主体のまちづくりを目指しています。平成11年に日本の棚田百選に認定された「榎平（くぬぎだいら）」は、棚田に隣接する展望地「一本松農村公園」からの眺望とともに、町民共有の財産であり、朝日町の自慢になっています。もちろん、博物館の重要な展示品（サテライト）となっています。

この小高い展望地では、山一面に「ヒメサユリ」が群生し、棚田の景観と併せ、住民・企業・NPOそして行政が、協力しながら保全しています。

見られる側の棚田は、あくまでも農業生産の場です。勾配のきつい農地、そして高齢化など、見せるための景観を守りながら営農を持続していくという作業の裏には、関係者の様々な苦労と約束事があります。

ここまでたどり着くまでの取り組みとその経過報告です。



●ことのはじまり（動機）

- ①棚田百選認定後、たくさんの人が棚田を訪れるが、地元住民は無関心。
- ②米価の低迷、耕作者の高齢化に伴い、稲作の後継者が不足。
- ③ついに、棚田区域内に耕作放棄地が発生。
- ④棚田は生産の場、見る側の都合だけに合わせられない。
- ⑤農業用施設の老朽化に伴い、維持管理への負担が増してきた。

●きっかけづくり（誘導）

- ①何かはしなければならない。それはわかっているが、誰が中心になり、何をどこから始めたら良いのかわからない。
- ②地元の農家から水土里ネット朝日町（土地改良区）に相談があった。
- ③そして改良区から、町を通して県に相談があった。
- ④改良区、町・県合同による、地域現状を聴き取る調査を開始した。
- ⑤手間（これ以上負担）の掛かることはしたくないという地域住民。
- ⑥言いたい放題言われても、金の掛かることは極力避けたい行政側の気持ち。
- ⑦ヒメサユリの保全ということでは、地域全体がまとまっているという事実。
- ⑧エコミュージアムの展示品といいながらも、守るのは農家という現実。
- ⑨今後、持続した営農は約束できないと言う高齢者。
- ⑩これらを話し合うワークショップを開催してみようという県側からの誘導。

●どう取り組んできたか（経過）

平成15年 関係農家27戸で榎平（くぬぎだいら）
棚田保全活動推進委員会を立上げた

※ワークショップ開催時の言い出しっぺ

平成16年 委員会が「棚田と地域の未来を考える」
ワークショップを開催（住民90名が参加）

※職業・年齢・性別の枠を超えた参加者で話し合った

平成16年 ワークショップで完成した活動計画と
マップを発表する棚田シンポジウムを開催した

※県内外からの250名を前に、将来の構想を発表した

平成16年 棚田受益者の奥さんたちで結成した、棚
田ママの会が発足し活動を開始した

※ワークショップから生まれた活動グループ（女性の参画）

平成17年 地域の活動として新スポット『第二展望
台』と『トイレ』の整備を実施した

※自分たちが費用を負担し、管理していく覚悟がついた瞬間

平成17年 地域住民や来訪者との交流の場として、
第1回「ヒメサユリまつり」を開催した

※棚田ママの会が大活躍、誰もが認める発表の場となった

平成17年 今までの活動が、第1回美の里づくりコ
ンクールにおいて、農村振興局長賞を受賞した

※保全活動の全国デビュー（活動の方向性を確認した）

平成18年 棚田保全活動に参加してくれる保全隊員
の募集を行った（参加者60名でスタート）

※県内外からの申し込みにおどろき（活動への対外的評価）

平成18年 労働力対価チケットを使った保全隊員の
活動が開始した

※春から秋まで農作業や地域環境保全活動を隊員がサポート

平成18年 自然杭掛け米と棚田景観の付加価値をプ

※知名度向上によるブランドの確立（継続した活動の成果）

平成18年 東京で開催された「第1回棚田フェス
ティバル」に棚田ママの会が参加した

※他地域のアイデアを知り、自分たちに生かす努力

平成18年 労働力対価チケットと地元農産物を交換
する収穫感謝祭を開催

※自分たちが作ってきた交流が形として現れた日

平成18年 棚田情報誌「榎平棚田通信」を発行し、
保全隊員の活動報告や次回作業予告を配信してきた

※地域内外に活動を知らせるパーツ



●活動成果と土地改良区や行政の支援（組み立て）

①ワークショップの開催

全てのきっかけとなるワークショップを開催する（したくなる）ための誘導や、実践組織の立上げまでの支援。ならびに、開催時のプログラム作成、進行などのアドバイスや技術的な支援。また、それらを材料として、地域の振興計画にまとめ上げ、実行時期や役割分担について、地域住民や行政機関の合意形成を図る手段を支援。

②計画から実行への移行

改良区、町、県が打合せながら、計画を実行に移していく地域での活動へのきっかけを仕組んできた。必要となれば、活動への費用を支援する事業についても、既存の事業を活用したり、新たに創設して対応してきた。

③逃げられない仕掛けづくり

関係者の枠を超えた地域住民と行政職員、そして全県にエリアを拡大した参加者を前に、自分たちがつくった「活動計画」を自らが発表する、棚田シンポジウムを開催した。様々な機関を巻き込んで、全県規模を対象として調整してきた。言うなれば「決意表明の会」という位置付けだ。

④対外的評価を得ること

そのたび活動を内外に予告し、結果についても報告することに慣れてもらった。関係機関へのプレスリリースはもちろんのこと、行政機関や団体が実施するコンクールへは、積極的に参加し、自分たちの活動がどう評価されるのか、どのような位置にいるのかを確認する機会を提供してきた。

⑤付加材料をつくる活動

ここ堰平の良い部分を、作物への付加価値として使えないかを話し合っていく。労働力の問題から、あきらめていた杭掛けによる米の自然乾燥や、棚田周辺の環境整備に非農家の労働力を借りられないか検討、棚田保全隊員を募集した。隊員の協力により、見事な風景が蘇り、この環境で造られる米に値打ちが付いた。

⑥付加価値米としての販売

まじめに作った棚田米を委員会として販売することにした。今年度産米のうち、全面積の約3割程度が企業や商工会青年部からの契約栽培米となった。個人農家の増収はもちろんのこと、付加価値分の一部を会で積み立て、労働力対価チケットの運営費用や、農業用施設の維持管理費への補填として活用されることになったのだ。

⑦課題の解決に向けて

ここまで活動が進んでくると、ことのはじまりとなっていた、地区が抱えていた課題が自然に解決へと動き始める。米価◎、労働力◎、共働による耕作放棄地対策◎、地元住民の関心と協力◎、維持管理費の負担対策◎、あとは、稲作に関心を寄せなかった若手の後継者を確保することが課題だ。対外的評価を得、向かうべき目標が形となり始めたいま、もう一押しという段階にたどり着いたという感触だ。

●大事なこと（展開）

①継続という努力

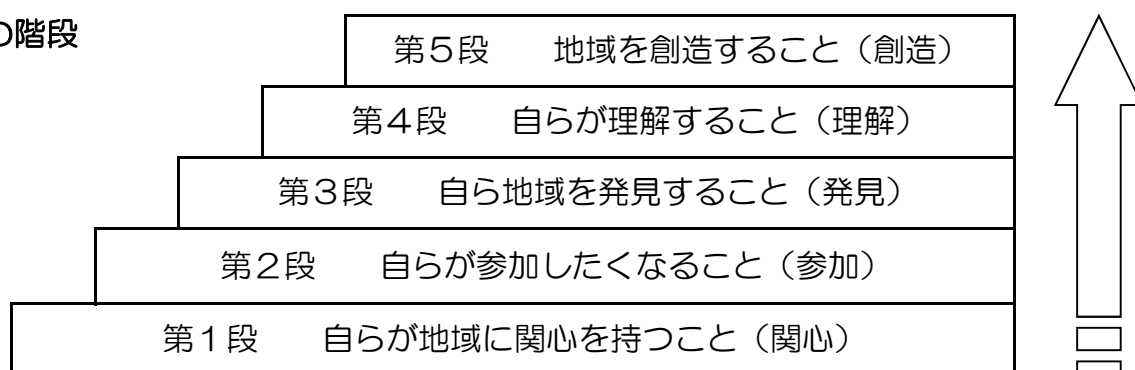
きっかけから計画に、計画から実践に、実践から成果へ、その場面ごとに行政が支援してきたからやってこれた部分がある。今後は、独り立ちして継続していける体制を地域で整備していかなければならない場面が来た。その努力をしなければ、継続はあり得ない。そのためには、行政が突き放したり、一気に引き上げるのではなく、いつでも相談役という立場に変わっていくことが必要だと考えている。

②活動に広がりをつける

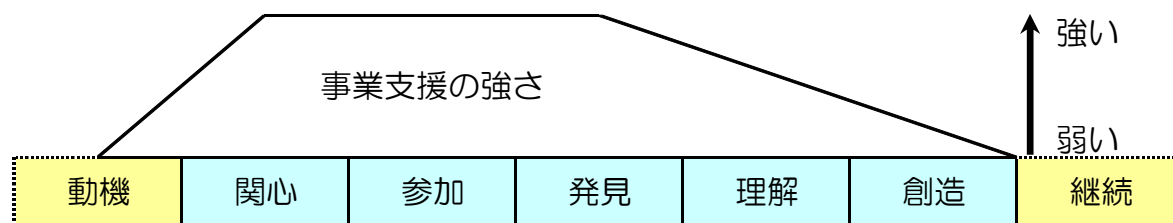
今回実践してきた棚田エリアでの活動は、あくまでもモデル的な実験であったが、現在地域全体の農業に影響を与えはじめている。この流れを逃がさないで、持続した集落営農を目的とした組織の立上げや、地域ぐるみの集落環境保全活動、そしてそれぞれが持っているノウハウを出し合い、互いに補える関係づくりに発展させていく必要がある。その基盤は完成しつつあると考えている。

●事業の狙うところ（目的）

①発展の階段



②事業支援の重点イメージ



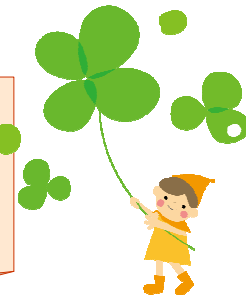
③共働支援の持つ意味

- ・多様な部や課が共に考え、共に動き、共にノウハウを提供する仕掛けづくり
- ・地域、市町村、県が共有の目的を持ち「互いに補う関係づくり」

“参加者の声”

● すばらしいワークショップでした。地域の方々と行政の方々との連携もすばらしく、これからの取り組みが楽しみです。

● 吉川に住んで29年、自分は今まで何気なく吉川を見ていたことに、初めて気付く機会になりました。吉川には、文化・歴史がたくさん有ることに驚いています。また、みんなで話しているうちに、皆の意見がひとつになるという素晴らしい体験ができ、勉強になりました。どんな住みよい吉川になるのかな？



みんな仲良く
元気な地域
にしたい

地域の資源を
売り出したい

なくなった
お祭りを復活
させたい

事業を
契機に
地域づくりに活かし
たい

地域づくり ワークショップ のススメ

支援メニュー

地域診断技術の提供

地域づくりを志す地域に専門家(県職員)を派遣し、総合診断を支援

地域づくりワークショップ等開催支援

地域座談会の開催やワークショップ運営の手法を支援

行動計画書づくりの支援

計画を実践に移行するための地域行動計画づくりのノウハウを提供

実践活動への支援

実践活動(自然環境や景観の保全、食品加工等)推進のための県関係部署や関係機関の専門家を派遣

地域づくりリーダーの育成支援

継続した地域づくりを可能にするための地域リーダーの育成を支援

県内外の事例を紹介

地域の活動が活発になるための事例や交流を支援

ワークショップ のポイント

何の
ために

どんな
方法で

どう
なるの

ワークショップは、目的(何のために)、方法(どんな方法で)、得られる成果(どうなるの)を皆さんが納得して取り組むことが必要です。

ご相談窓口

山形県村山総合支庁
産業経済部農村計画課
企画担当

TEL 023-621-8388
FAX 023-621-8463
〒990-2492
山形市鉄砲町二丁目 19-68

山形県最上総合支庁
産業経済部農村計画課
企画担当

TEL 0233-29-1339
FAX 0233-23-8355
〒996-0002
新庄市金沢字大道上 2034

山形県置賜総合支庁
産業経済部農村計画課
企画担当

TEL 0238-26-6056
FAX 0238-21-6943
〒992-0012
米沢市金池七丁目 1-50

山形県庄内総合支庁
産業経済部農村計画課
企画担当

TEL 0235-66-5549
FAX 0235-66-3018
〒997-1392
三川町大字横山字袖東 19-1

山形県農林水産部農政企画課 企画担当

TEL 023-630-3315 FAX 023-630-3096 〒990-8570 山形市松波二丁目 8-1



夢へと続く 扉を開こう

山形の“元気な地域づくり”を支援する
元気な地域づくり支援プロジェクト事業
地域づくりワークショップ運営支援
集落の夢を描き、扉を開くプログラム



創造

理解

発見

参加

関心

地域づくりワークショップとは、参加者が自由に考えを出し合いながら、地域の良さを見つけたり将来について話し合ったりする活動のことです。参加者どうし、互いの提案を尊重しながら平等に話し合いを進めていきます。

子どもからお年寄りまで、地域のあるもの探しで見つけたお宝をみんなで育ていくプログラムです。地域が元気になる仕掛けがいっぱいある地域づくりワークショップに取り組んでみませんか。





大瀬物語り

製作プロジェクト



小学校閉校を目前として 地域のあり方を考える

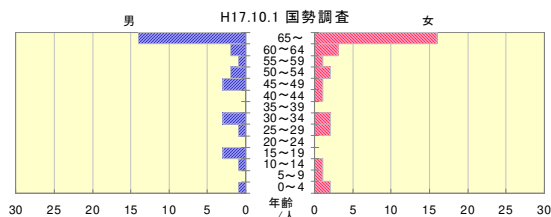
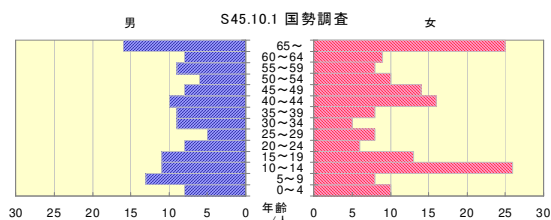


白鷹町大瀬地区は、最上川沿線にたたずむ集落で、過疎化と高齢化を克服し何とか明るい将来を展望したいという思いから町や関係団体の協力も得ながらプロ派遣事業に取り組んできました。

プロ派遣事業では、地域づくりプランナーがその地域に最適な地域づくり手法をアドバイスしながら関係者の合意を得

てプログラムを進めていきます。

大瀬地区では、地区内外の人たちが集落内を点検して「お宝マップ」を作成。それをベースに今後もここで（大瀬）？住み続けていくために何が大切かを考えた「ごらく構想図」を地域の成果として取りまとめました。いつ、だれが、という行動計画もできており、今後の大瀬の発展が楽しみです。



人口分布調査

年	月	日	内容
1594	文禄3年	「高目集帳」	※村高戸30石1斗1升
1600	慶長5年	最上戦争当「大瀬口」よりハツ巡城攻め 関ヶ原の戦い	
1670	元和年間	「塩碕（むらかみ）」	※村高戸30石1斗1升、戸
1693	元禄6年	番所の設置。大瀬、平田にも番所設置	
1694	元禄7年		
1820	文政10年	〈山形県史料〉	※戸数4戸、人口186人（男1
1870	明治初期	大瀬〜柳屋間道路開設	

地域の歴史を振り返る年表作成



活動を振り返り、大瀬の地域づくりの次のステップへとつなげていくためのまとめの会を開催。一年前とは違う輝きのある笑顔が印象的でした。

この後実施された「うまいものフェスティバル」では、地域特有の資源や伝統料理などを再発見する良い機会となりました。

これからも、まだまだ頑張大瀬（がんばろ〜ぜ）。

“大瀬物語り”の製作 ～大瀬の生き活きを語ろう～ ワークショップ

支援内容

- ① 集落の現地調査
- ② 調査結果の診断・解析支援
- ③ 地域活性化プログラム作成支援
- ④ ワークショップ開催支援
- ⑤ 行動計画づくりへの技術支援



地域づくりワークショップの成果「ごらく構想図」



「吉川の未来を創ろう!!」ワークショップ



明日の吉川を創る127の提案がまとまりました！
第4回のワークショップで成果発表会を行いました（3月1日）

【今年1年の歩みを振り返って】

昨年の8月、区・公民館・婦人会・若妻会・若衆会・PTA等の参加者で構成し、活動を行ってきた「吉川の未来を創る会」。平成24年度から統合小学校がスタートするとき、地域の小学校がない中で、吉川の地域活動をどのように行っていけば良いのかを考えようと本会は設立されました。以来、小学校統合を一つの契機にし、単に吉川の地域行事のあり方だけを考えるのではなく、将来の吉川がどのような地域になっていくべきかを5回に渡って話し合ってきました。

話し合いは「ワークショップ」という気軽に参加者全員の思いが語られる方法で行われました。あるときは毎週に地図を見ながら、あるときは現地を実際に訪れ、まだ現地で撮った写真やメモを見ながら、「吉川の宝物」や「もっと良くしたい」「やってみたいこと」などを話し合ってきました。参加した方々からは「知っているようで知らない吉川があった」「吉川にも他地域に誇れるものがある」「新しい取り組みを是非実現させてみたい」という声があがりました。地域の良さを再確認と吉川の未来創りに対する気運が高まってきたようです。

3月1日に開催された第4回のワークショップでは、話し合いを重ねてきた結果、参加者から寄せられた、未来の吉川に対する「127の提案」がどのようなものであったか発表されました。

【第4回ワークショップの様子】

ワークショップでは参加した方々がどのような提案を行ってきたのか、分かりやすく大きく6つの項目に分けた形でまとめ、発表されました。6つの項目は次のとおりです。

- 産業を興す・収益に結びつくこと
- 歴史的なものの保存・宣伝、文化の伝承
- お祭、イベント、レクリエーション、地域活動への参加
- 建物、道路などのハード面の整備
- 美しい風景を守る、花の植栽など美化活動、ゴミをなくす
- 地図、絵はがきなどを使っての情報発信

以上の項目にキャッチフレーズをつけて発表しました。詳しい内容は次のページをご覧ください。



ワークショップのまとめを発表する
地域派遣職員の安達晴美さん

ワークショップ

って、簡単にできるの？

地域を良くしようという皆さんの気持ちがあれば取り組みます。皆さんの地域を事前に調査して、どのような方法が良いかを提案します。主催は皆さんになりますが、開催からフォローアップまでワークショップの運営を支援します。

「吉川の未来を創ろう!!」ワークショップ

よしかわ 未来づくり通信

ワークショップから生まれた127の提案の主な内容

【6つのキャッチフレーズ】

127の提案は大きく6つの項目に分けられます。そのキャッチフレーズは次のとおりです。

産業を興す・収益に結びつくこと	豊かな資源を活かす
歴史的なものの保存・宣伝、文化の伝承	次世代に引き継ぐ歴史と文化
お祭、イベント、レクリエーション、地域活動への参加	みんなで参加吉川の地域づくり
建物、道路などのハード面の整備	住み良い地域にしよう
美しい風景を守る、花の植栽など美化活動、ゴミをなくす	水と緑のある美しい吉川の里
地図、絵はがきなどを使っての情報発信	自慢しようふるさと吉川

【提案は「いつ」「だれが」するのか】

127の提案は誰かに「〇〇してほしい」ではなく、参加した方々が「〇〇したい」「〇〇していきたい」との思いの結集です。また、提案毎に「いつするのか（優先順位）」「だれがするのか（役割分担・主体）」も考えています。6つのキャッチフレーズに整理された127の提案の主な内容は下記の通り記載しましたので、ご覧ください。

1 豊かな資源を活かす 提案数34件

小項目と提案された数（ ）内が数	提案の主な内容	優先順位 今すぐ	将来 2〜3年	個人	組織 団体	地域 と行政	行政
今ある資源を活かす（4）	育苗ハウスを使った後に他の農作物を栽培する	○			○		
月山まんま工場を活かす（4）	区の山（伐採地）をワラビ園にしたらい	○			○		
小学校を利用する（10）	月山まんまの工場で吉川の直売所を開き農産物売る	○			○		
山を利用する（5）	直売所に雑木を切ってキノコ栽培し売る（山の更新）	○			○		
トラワインとの連携（5）	小学校で飲み屋をやる		○		○		
地域産業をPRする（6）	小学校を漬物加工食品製造施設にする		○		○		
	山里の価値を見直し間伐材の手入れして炭焼きする	○				○	
	環視で刈った木を利用して地域のプレゼントにする	○					○
	ぶどう畑で作ったぶどうをトラワインでワインにする	○					○
	ワイナリーでワインと地元食材の楽しめるレストラン	○					○
	西川牛の大きな看板を立てたらよい	○					○
	山形97号と月山まんまの地域として全国にPRする	○					○

よしかわ 未来づくり通信

「農山漁村地域づくりプランナー」認定登録制度

1 趣旨

山形県農業農村整備関係職員研修実施要領に基づき、業務遂行能力の向上を図るために実施する組織研修として、「農山漁村地域づくりプランナー」の認定登録制度を定めることにより、地域での話合いや合意形成のためのワークショップ技術を有した職員の育成を図り、農業・農村を持続的に発展させる生産基盤の強化と、農業生産が支える美しく活力ある農村づくりを推進する。

2 農山漁村地域づくりプランナーの定義

県が定めた研修制度を修了することで、地域での話し合い・合意形成のため自らの技術でワークショッププログラムを企画運営する能力を身につけた県職員とする。

3 認定要件

以下の研修を基準回数以上、受講又は実践することを認定要件とする。

区 分	内 容	対象とする研修	基準
1)基礎研修	WSの基礎知識と演習研修の受講	職場研修等で農山漁村地域づくりプランナー等が行うもの	1回
2)現場研修	地域で開催されるWSへの参加・体験	現場で行われる様々なWS	1回
3)企画研修	WSの企画研修の受講 [具体のプログラム作成等]	具体的にプログラムの作成が可能となる研修 ※	1回
4)実践研修	自らWSのプログラムを作成し、WSを実践	農山漁村地域づくりプランナーのサポートを受けながら自らファシリテーター行ったWS	3回

※元気な地域づくり支援プロジェクト事業など

4 認定登録方法

- (1) 所属長は、毎年度末までに上記の4つの研修を修了した職員に対し、農山漁村地域づくりプランナー認定審査資料及びワークショップの報告書を提出させ、様式1により農林水産部農村計画課長に認定申請するものとする。
- (2) 農林水産部農村計画課長は、認定申請の内容を審査し、認定証を様式2により交付するものとする。

5 農山漁村地域づくりプランナー育成名簿の更新

別添「農山漁村地域づくりプランナー育成名簿」は、毎年度末に農林水産部農村計画課事業調整担当にて更新する。

様式 1

○ ○ 第 号
○○ 年 月 日

農林水産部農村計画課長 殿

(所属長)

農山漁村地域づくりプランナー認定申請書

農山漁村地域づくりプランナー認定登録制度に基づき、下記職員について全研修課程を修了したので、認定審査資料及び報告書を添えて農山漁村地域づくりプランナーの認定を申請します。

記

職 名	職員名

農山漁村地域づくりプランナー認定審査資料

報告月日			
職員名		職 名	

区 分	研修の実績	実施年度
基礎研修		
現場研修		
企画研修		
実践研修 [別途、WS報告書提出]	・ ・ ・	・ ・ ・

サポートを行った農山漁村地域づくりプランナーの所見
農林水産部農村計画課長の所見

認定の可否		審査年月日：
-------	--	--------

「深山生き生き 行きたくなる郷」を めざして

ふるさとづくり計画書



平成20年11月

山形県深山郷地域協議会

目 次

はじめに	1
1. ふるさとづくりのテーマ	2
2. 地区の将来像	2
3. 計画期間	2
4. 現状と課題	2
5. 目 標	3
6. 今後の活動方向と期待される効果	4
7. 事業計画	6
8. 地域資源	7
9. 深山の向かうべき姿	10
10. 具体的提案整理表	11
11. 数字で見る深山の現状	12
12. 協議会の組織体制	13
13. 提案を実現するために	13
寄稿 「みやま風景回廊」をつくる	14
農山漁村地域力発掘支援モデル事業」とは	16

はじめに

深山地区は、白鷹町の北部に位置する中山間地域で、朝日山系を背景に三方を山に囲まれ、清流実淵川と黒沢川の合流地点に開け、自然豊かでのどかな農村景観が形成されています。昭和40年代は、戸数 100世帯、人口 500人超でしたが、現在、83世帯、313人、高齢化率 32.9%となっています。

農業は、水稻を中心にホップ、ブドウ、サクランボ等の複合的な経営や大規模な酪農経営など多種多様な経営が行われています。農家数は年々減少し、現在 28戸と後継者不足が課題となっています。

また、室町時代の建立と推定され国の重要文化財に指定された深山観音堂や県指定無形文化財の深山和紙、地藏堂、石仏、草木塔などの歴史や伝統的資源が、数多く存在しています。その他、昔の養蚕農家をそのまま移築した農家民宿「のどか村」やそこで提供される伝統料理や手打ちそば、蔓細工やワラ細工体験、陶芸体験など、文化や技能に関わる地域資源も存在し、農村としての生活風景が色濃く残る地区です。

これまで地域の方々の協力の下、地域づくりを進め、のどか村の運営や休耕地の活用、広報活動など様々な実績を重ねてきました。しかし、当地区でも、少子高齢化と過疎化が進行し、将来を予測したとき「限界集落」問題は無関係とはいえない状況にあります。今のうちに将来に向けた対策を講じる必要があります。

このたび農林水産省の農産漁村地域力発掘支援モデル事業を導入し、有効的に地域づくりを進めていきます。

この計画は、多くのみなさんの参加のもと、ワークショップの手法を用い「深山講」として取り組み、実際に地区内を歩いて、より住み易い魅力的な深山になるよう提案をまとめました。

いま、「深山生き生き行きたくなる郷をめざして」をテーマとし、当面の活動の指針とするものです。



※「限界集落」とは、

人口の5割が65才以上の高齢者となり災害対応や冠婚葬祭、お祭りなど、集落の共同力の維持が困難になった集落のことを指し、近い将来は集落消滅もあり得る危機的な状況のことです。集落機能の衰退は、今まで引き継いできた景観や文化を失うばかりか、生活基盤となっている山や川、そして住宅や農地の荒廃にも直結します。

1 ふるさとづくりのテーマ

深山活き生き 行きたくなる郷をめざして

2 地区の将来像

地域住民をはじめ各種団体、企業などの連携の下、新たな視点と実践によって、地域資源の活用や保存によって地域住民がより住みやすく、自信を持って生活できるよう、継続した地域づくりに取り組みます。また、都市住民等に深山でしか味わえないふるさと体感を提供するため、その受け皿づくりに取り組みます。

このことにより、活き生きした深山郷の実現と覗きたくなる・行きたくなる深山を実現していきます。

3 計画期間

平成20年度～平成24年度



4 現状と課題

経営面とともに、冬は積雪期間が長く降雪量も多いことや、大半の耕地が急傾斜地にあり労働条件が悪いことから、離農や転出が進行しています。その影響から、耕作放棄地の増大、農業用水や生活用水源となっている里山の管理放棄、空き家の出現が見受けられ、深山地区の農村景観の維持にも影響が出ています。

室町時代に建立された深山観音堂は、重厚な茅葺き屋根が特徴となっています。これまで、深山地区で茅を調達してきましたが、茅場も絶え屋根葺き材料の調達を他の地区に依存しなければならない状況になっています。

また、農家の冬期間の副業となっていた深山和紙も、かつて40か所以上もの紙漉き場が存在していましたが、和紙の需要の減少や手間がかかること、経済的な問題から現在ではたった2か所まで激減し、その技法を守る後継者の育成が緊急な課題となっています。

さらに、かつては盛んだった養蚕は、生活様式の変遷と共に衰退し続け、地域に存在していた桑畑は荒廃桑園となっています。農地として再生するにも傾斜地や点在しているため活用できないでいます。

これらの現状を地域全体の課題としてとらえ、地域に存在する資源を組み合わせながら活用していくための行動計画を立て、実践し、実現させていかなければなりません。



5 目標

1

深山和紙を伝承する。

具体的目標

楮畑・ニレ畑を10a整備して原材料を確保。和紙漉き技術習得者の育成10名以上。

2

深山観音堂を保存する。

具体的目標

屋根替え資材の茅場を20a整備。

3

来訪者と交流を図る。

具体的目標

季節毎の体験メニューを企画・実践。

4

深山らしい景観を創出する。

具体的目標

深山地区の統一した「木」や「花」や「色」を決める。地区内の建物の70%以上の屋根色を統一する。

5

地域間交流を図る。

具体的目標

そば打ちを通して、愛媛県内子町石畳地区と交流。10名の「そばの匠」を育成する。

深山活き生き 行きたくなる郷を

1 深山和紙等の伝統を 地域が守る体制づくり

耕作放棄地を利用し、楮やニレの栽培を行うことで、深山和紙の原料の確保を図ります。

また、地域ぐるみで県無形文化財である伝統技術を集団伝承していく仕組みを確立します。

さらに、各種神社等の祭礼や地域に伝わる各種行事等を伝承するため、若者が参加できる体制を整え、祭りの復活と継承を図ります。



2 国重要文化財「深山観音堂」の保存と茅場の整備 及び管理

深山観音の屋根材確保を目的とした茅場を整備し、農村らしい風景をつくります。共同管理により材料を調達していく仕組みを作り、地域内の荒廃地の解消につなげます。

また、地域のシンボルである深山観音堂を



地域として守っていく体制をつくり、皆が関わっていくことで、地域コミュニティの回復を図ります。

3 体験メニューづくりと 高齢者の生きがいがづくり 及び遊休農地等の活用

耕作放棄地の活用や里山づくりにより地区内を体験と学習のフィールドとして、各種農業体験やそば・伝統料理など食文化を通した体験メニュー作りを進めます。



めざして



のどかさを売りにする深山流ライフスタイルと深山が醸し出すノスタルジアの提供を核とした深山の日常を総合的に鍛え水準を高め、来訪者に対しての非日常を提供していきます。

全ての住民が、自分の得意分野で地域づくりに参加することで、その受け皿となる組織の設立や活動をサポートしていく体制づくりをすすめます。



4 地区内景観等の統一による深山らしい風景の復元

独居家庭や空き家などにより管理が行き届かなくなった屋敷林を共同管理したり、案内板を統一して整備したり、深山郷の「色」「木」「花」などを決め地域全体で取り組むことによって、深山らしい風景づくりをすすめます。

地域住民が深山らしい風景のあり方を話し合い、共通認識を持つことで将来的な地域デザインを描いていきます。

このことは、サインや色彩などの更新・新設の際の指針となり、公共事業等の実施においても地域の景観指針となります。

5 「深山活き生き行きたくなる郷」実現のための土台づくり

地域住民や多種多様な組織との連携と実践を通して、新たな取り組みや産業の創造を総合的に管理していく組織の設立を研究していきます。

愛媛県内子町石畳地区などとの地域間交流を実践し、互いが切磋琢磨しながら発展させる仕組みを確立していきます。

さらに、先進的事例の研修等により、深山独自の資源を再認識しながら地域づくりを実践していきます。

また、地区内の組織や実践方法を見直し、統合や再編により地域住民への負担を軽減し、活動に参画しやすい体制を確立していきます。



7 事業計画

区 分	活 動 内 容	実 施 年 度
1. 農林漁業に関連した農山漁村の伝統文化の保全、復活等に向けた活動	深山焼・深山和紙の伝承	20～24
	まつり・獅子舞の復活と伝承	20～21
	水車を復元し体験等にも活用	22～24
	そばの匠の育成と技術の伝承	20～24
	伝統食や郷土料理の伝承	21～24
2. 个性的で魅力ある地域固有の風景づくり等に向けた活動	地域の色・樹木・花を決め深山の風景を統一化	20～24
	案内看板等を統一して整備	20～24
	屋敷林や里山の環境整備	21～24
	風景に配慮した生活環境の整備（街灯・電柱・ガードレール・ごみ集積所のデザインを統一（撤去含む））	21～24
	休耕地を活用した景観作物の栽培	20～24
	棚田を維持・保全活動	21～24
3. 農山漁村に存在する地域資源を活用した村おこしに係る活動	深山観音堂の周辺整備と活用の検討	20～24
	湧き水を整備し活用	21～24
	深山の木 10 選（シンボルツリー）を認定	20～24
	深山観音堂屋根材となる茅の確保（茅場の整備）	21～24
	ビューポイントや散策コースを整備し景観回廊を設定	21～24
	オーナー制や農業体験メニューによる交流	20～24
	体験メニュー等の研究開発	20～24
	耕作放棄地を活用した伝統野菜や山菜の栽培	21～24
	特産品の研究や開発（伝統料理のレシピ作成など）	20～24
	情報の発信・公開（HP 開設や広報紙・報告会）	20～24
	散策や地域特産を PR するマップ・パンフレットの作成	20～24
	深山の自然生態を学習調査してホテルの飛び交う環境を復元	21～24
4. その他	他地区との交流促進と連携の強化（技術・文化の高揚）	20～24
	実践・持続可能な深山独自の組織体系の見直しと実践	21～24
	地区民総参加の地域づくりの実践	20～24

1 伝統文化

重要文化財の「深山観音堂」や県指定無形文化財の「深山和紙」、復興された「深山焼」などは、深山を語る上でなくてはならないものです。また、祭りや伝統行事はもちろんのこと、手打ちそばや伝統料理なども深山の大きな財産であり伝えていかなければなりません。



2 地域固有の風景地

朝日連峰や頭殿山を背景に、近くの里山の風景に四季を感じ暮らしてきました。また、個々の田畑、庭先の手入れはもちろんのこと、道端も花で彩り、潤いを与えてきました。当然ととらえてきたこの風景を守り伝えていかなければなりません。

先人たちが作り続けてきた棚田も守っていかなければなりません。また、名もない石仏や草木塔なども先人が伝えたかったものに違いありません。



3 地域資源

地区の中に実渕川と黒沢川の二つの河川が流れ、堰や湧き水も多くあります。これらをどう保全し、どう活用、維持管理していくか考えなければなりません。

深山でとれる農産物は、米、豆、ぶどう、さくらんぼ、ホップ、あけび、牛乳など各種にわたります。付加価値を付けた販売など所得につなげていかなければなりません。また、山菜やきのこなど山の幸も大きな魅力です。



9 深山の向かうべき姿

もう少し先の将来的な方向性について、**7つのキーワード**で示しています。

1

水を守り活かしていきます

- ・生き物が住みやすい環境を守る
- ・自然に配慮した河川や水路の整備
- ・実測川のビューポイント整備
- ・安心して川遊びができる川づくり
- ・湧き水や井戸の整備



2

深山らしいのどかな風景を創ります

- ・景観の良い所に展望台や遊歩道を整備
- ・杉の木を落葉樹に植え替える
- ・看板の見直しと整備
- ・和紙センター前の水車の復元
- ・景観に配慮した電柱やごみ収集所の整備
- ・壊れた空き家をなくす
- ・深山の「木」・「花」を決めて植栽



3

話し合い・認め合える地域をつくります

- ・全地区民が協力しあう地域づくり
- ・趣味・特技などを通じ年代を超えた交流
- ・地域ぐるみで結婚や子育て、後継者育成を支援
- ・組織や事業を見直し、効率的な活動
- ・「深山講」を定期的開催し課題を共有



4

深山の歴史を将来に伝えていきます

- ・深山観音堂を地区挙げて守る
- ・深山観音堂周辺の環境を整備
- ・大門の道路や水路を参道らしく整備
- ・石仏や草木塔を保存
- ・深山の歴史をまとめ伝える



5

深山の文化を守り大切にします

- ・深山和紙の伝承
- ・深山焼を守る
- ・祭礼や伝統行事の伝承
- ・郷土料理や手打ちそばの伝承
- ・地元産の農産物や山菜などの確保・活用



6

いきいきした深山を創造します

- ・体験やオーナー制度などで農業振興
- ・のどか村の体制や周辺環境を整備し誘客促進
- ・鉱泉の調査、温泉掘削・利用の検討
- ・冬季のイベントなど年間を通じた交流促進
- ・深山観音堂を活用した新たな取り組みの研究
- ・気軽に活動ができる体制づくり
- ・動植物とふれあう場の創設



7

暮らしやすい深山にします

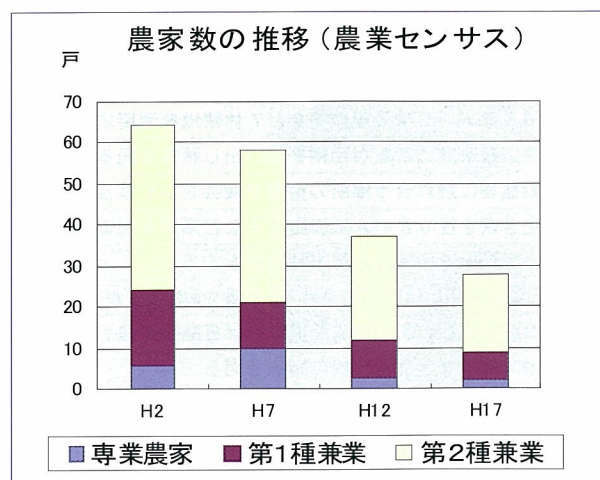
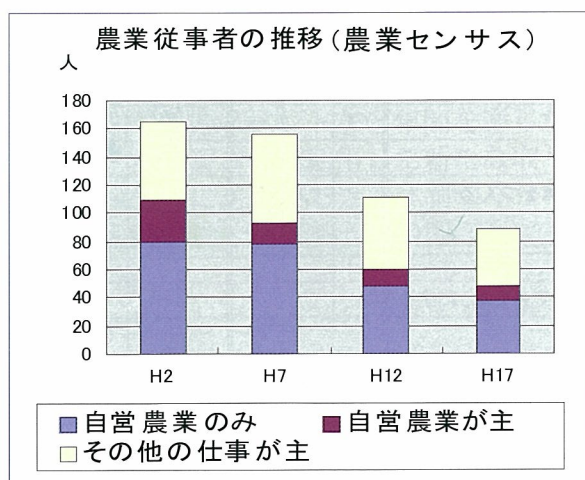
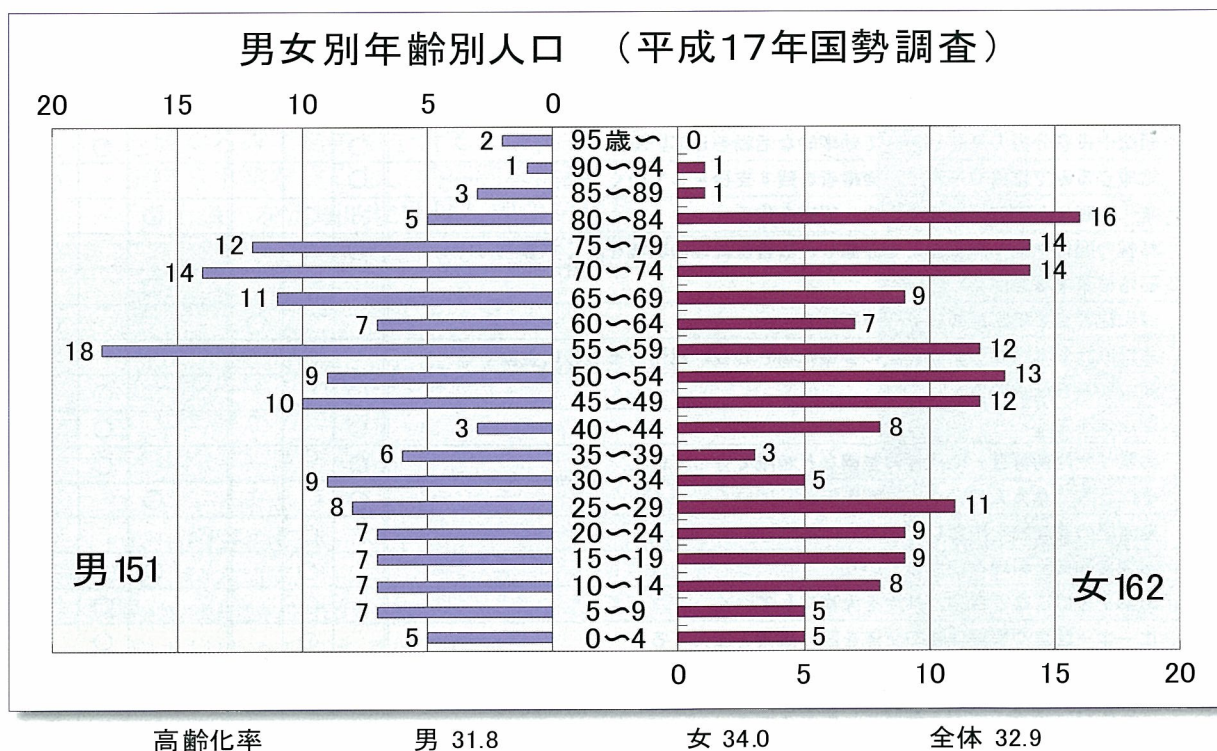
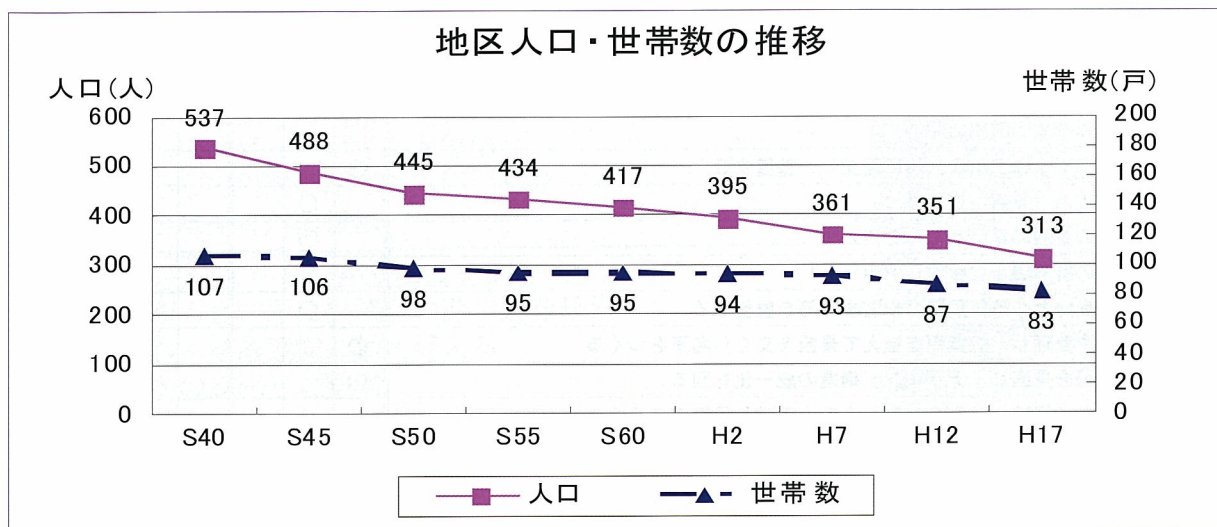
- ・安心してゆったりできる「自然公園」の整備
- ・運転できない人の交通手段を確保
- ・インターネット環境を整備し情報の収集・発信
- ・保安活動を推進し安心できる地域づくり
- ・空き家を活用し定住促進

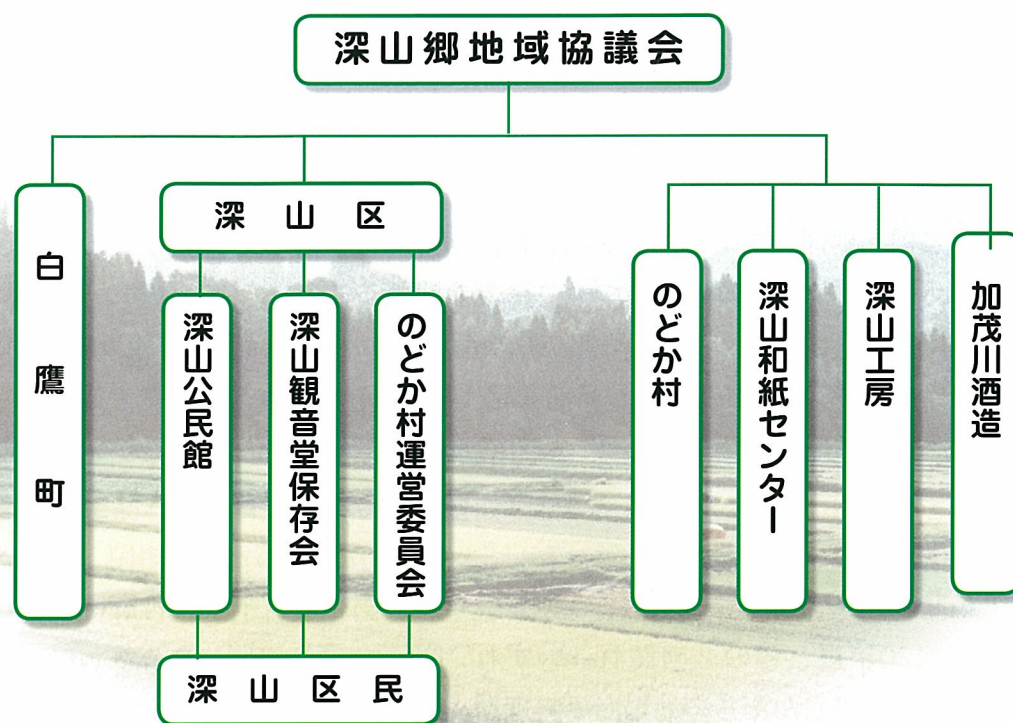


10 具体的提案整理表

分類	提 案 の 内 容	優先順位			役割・主体					
		今すぐ	2～3年	向将来に	個人	組織・団体	地域	政の協力	地元と行政	行政
1 水を 活かし 守り	魚が住みやすい河川にする	○					○			
	河川工事や水路工事は自然に配慮し、整備する	○						○		
	安心して遊べる河川にする		○					○		
	実測川の景観の良いところを活かす		○					○		
	井戸水の有る場所を整備し活用したし、		○				○			
2 のどかな風景を創る	景観の良いところに展望台や遊歩道等を整備する		○					○		
	杉の木を整理し、広葉樹を植えて景観を良くし名所をつくる	○					○			
	既存看板を見直し、デザイン・構造の統一化を図る	○				○				
	電柱の色や構造などを統一し、本数も整理し景観を良くする			○				○		
	統一した花や木を植栽し、花いっぱい運動を継続する	○					○			
	和紙センター前の水車を復元し活用する		○					○		
	壊れた空き家を撤去する		○					○		
	ごみ集積所を景観に配慮したものに新しくする	○						○		
	地区内の3橋を景観に配慮し整備する			○				○		
3 地域 話し合 合える	里山を整備し、自然景観を満喫できるようにする		○			○				
	地区民総参加の体制で地域づくりを進める	○					○			
	組織や役割分担の見直しをして効率的な活動をしていく	○					○			
	地域ぐるみで結婚や子育て、後継者を残す支援をしていく	○						○		
	年代を超えた交流ができる機会・組織を作る		○			○				
4 歴史を 伝える	杉林の間伐や池・施設などを整備し、観音堂周辺の環境を良くする	○						○		
	石仏や草木塔を保存していく		○			○				
	深山観音堂を地区民挙げて守っていく			○				○		
	大門道路や水路を深山観音堂の参道にふさわしい風情あるものに整備する		○					○		
5 文化を大切に	深山和紙を伝承する	○					○			
	深山焼を守る	○					○			
	お祭りや稲荷神社・地藏様の整備など地域で守っていく	○					○			
	そばうちできる人の育成や技術を伝承していく	○				○				
	地元産の農産物を確保していく		○		○					
	伝統食や郷土料理を伝承していく		○			○				
	山菜やきのこなど自然と共生を大事にしてい		○				○			
6 いきいきとした地域に	オーナー制度や農業体験で交流を図り農業を振興する		○				○			
	農業の現状と今後の課題を区民が共有し、早急な後継者育成を図る	○					○			
	のどか村の環境や体制を整備し、誘客を図る			○				○		
	「うわさ」の鉱泉を具体的に調査し、温泉発掘を推進する	○						○		
	地区内探検や情報交換しながら観光マップ・DVD・キャッチフレーズをつくりPRする	○						○		
	一年を通じた体験や冬季のイベントメニューを増やし誘客を図る	○						○		
	だれもが気を使わずに自由な活動ができる体制づくりをする	○				○				
	田んぼアートや景観作物などで休耕地を活用する	○					○			
	深山観音堂の新たな活用を見出し誘客を図る		○			○				
	動植物に触れ合う場所の整備や機会をつくり自然に親しめる環境をつくる		○			○				
7 暮らしやすい地域に	空き家を住みたい人に斡旋するなど活用を図る			○				○		
	県道深山下山線的全線早期改修をする	○							○	
	自然を利用した「公園」を作り、子供やお年寄りが安心して、ゆったりできるようにする		○					○		
	お店が欲しい、景観に配慮すれば自動販売機も欲しい			○			○			
	バス運行など交通手段の確保を図る		○					○		
	インターネット（光）の整備をする	○						○		
	独り暮らし宅や登下校時の巡回など地区の保安に関する活動を推進する	○						○		
	公民館を建替え活動拠点として交流を図る			○				○		

11 数字で見る深山の現状



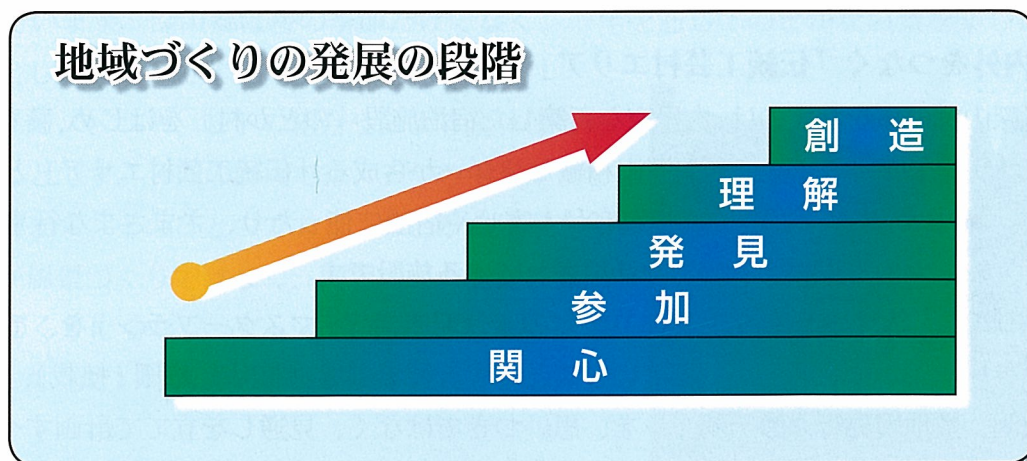


13 提案を実現するために

このたびのふるさとづくり計画は、深山の地域づくりについて当面の具体的な手法等を表したものです。構成員全員が同じイメージを描けることが大切です。皆様のいろいろな工夫やアイデアを出し合い進めていきましょう。

当然、地域づくりは一部の人だけで進められるものではなく、地域を挙げて取り組まなければなりません。関心を持って地域づくりに参加し、自ら何かの課題を見つけ、みんなが理解しながら地域を創り上げる意識付けが重要です。また、これからは地域以外の方々とも協力・連携も必要です。

深山に誇りと愛着をもって地域づくりを進め、安心して暮らせる地域をめざします。協議会の想いをひとつにして、より良い深山づくりをしていきましょう。



「みやま風景回廊」をつくる

宇都宮大学名誉教授 / 農林水産省農村景観応援団

藤本 信義

もう40年ほど前、栃窪の集落移転先を訪れたのが白鷹町を知るきっかけでした。その後、私は大学研究室の助手として飯豊町のまちづくりに深く関わることになるのですが、白鷹町は同じ置賜郡に位置しているせいか、今回初めて訪れた深山の人々にも何となく親近感を覚えています。ただ、ほとんどの方が「樋口さん」で、名前を覚えないと誰かわからないことには驚きです。

今後の実践活動にあたり、深山の風景づくりを進める際の基本的な考え方を述べてみたいと思います。

●「のどか」な深山の印象

深山には平成20年夏と冬の2回訪れ、いずれも「のどか村」のお母さんたちの地場産手料理を堪能しました。季節に応じた献立があるように、深山郷の四季の風景にはそれぞれの楽しみ方があるはずです。深山という地名でありながら、山並みがそれほど迫っているわけでもなく、田畑に囲まれた80戸の集落は閉鎖的な感じのしない、まさに「のどか村」という印象です。この恵まれた自然と由緒ある行事や歴史を、訪れる人たちに四季折々のもてなしとして味わってもらえる工夫が、ワークショップ「深山講」で検討されたのではないかと推察できます。実際に現地を案内してもらうと、深山観音堂や深山和紙のほかはとびきりの逸品があるわけでもないのですが、むらの暮らしを支え、人々が大切にしてきた諸々のモノ、コトが浮かび上がってきて、これらを少しずつ料理すれば「いきいきした深山郷」づくりは充分期待できるのではないかと思います。



●むらの内外をつなぐ「伝統工芸村エリア」

いきいき深山郷の核をなすのは、古民家を再築した宿泊施設「のどか村」をはじめ、蕎麦打ち（体験）小屋、登り窯を備えた深山工房、深山和紙センターから成る「伝統工芸村エリア」といってよさそうです。「のどか村」は集落内の各家庭が人寄せや宿泊に使ったり、さまざまな行事にも利用されるなど、むらの内外にわたって有効活用されている施設です。

風景づくりの観点から「伝統工芸村エリア」の全体配置構想（マスタープラン）を、できるだけ多くの住民参加により創る必要があるということです。行事広場、駐車場、庭園（植栽）、コウゾ畑、案内板、照明、敷地境界等々のデザインを、思いつきではなく、見通しを立てて計画すべきです。

冬季は雪の処理だけでも一苦労だと思いますが、それ以外の季節には「伝統工芸村エリア」全体に「うるおい」を与える（心がなごむ）工夫が求められます。

● 深山観音堂まわりに磨きをかける

深山観音堂は、深山郷のシンボリック的存在と思われます。多少の不並びなど気にもかけずに積まれた長い石段は、参拝の心の準備をするに十分な時間と空間を演出しています。石段脇に流れる水の音が、境内の静けさを却って深めているようです。ここ深山郷は歩いているとあちこちから水音が聞こえてきます。この音の風景（サウンドスケープ）を是非大切にして、新たに落差溝や水車等で水音を生み出すことも考えられるでしょう。

観音堂を久ぶりに訪れて、葺き替えられた屋根の形が変わっていることに気づきました。本来の姿であったのか、国指定の重要文化財であるだけに気になります。

参拝者がお堂に貼り付けた「千社札」は、端正なお堂の表情を汚しているのです、別の場所に参拝の印を残す場を設ける必要があります。

むらではお堂まわりの樹木を伐採することに決めたとのことで、深閑とした境内の雰囲気は、まわりの古木たちによって生み出されていると言えますが、お堂の茅葺き屋根にとっては日差しが届かなければ朽ちるのも早く、住民納得の措置と思われます。後にはモミジ植栽の案が出ているとのことで、由緒深い観音堂に磨きをかける風景づくりを望みます。

● 風景はモノ、コト、ヒトの組合せ—「つなぐ」ことが大切

深山郷には、風景づくりの資源がたくさんあります。背後に朝日連峰がめぐる頭殿山の眺め、架け替え予定の橋上から見た実渕川の流れなどがワークショップ「深山講」でお薦めのポイントに挙げられています。他にも、一本杉、モクレン、クルミの木といった巨木・古木がむらの風景にアクセントを与えています。道を行くときの目印になるという意味で「ランドマーク」と言われますが、草木塔、庚申塚、馬頭観音、お地蔵様、史跡類などもランドマークに数えられます。また、むらの土地利用の大部分をなす農地の風景は、季節変化を最も端的に示しています。それらを「つなぐ」のが「みやま風景回廊」です。白鷹町は点在する古典桜を称して、「さくら回廊」と名づけています。深山郷は桜の季節だけでなく、一年を通してのどかな風景を楽しむことのできる回廊としたいものです。

風景は、モノ、コト、ヒトの組合せによる全体像であるということです。今回の計画では、7つの提案がまとめられています。そのひとつである「のどかな風景を創る」だけが風景づくりではなく、内容のどれもが、深山郷の風景づくりにつながっているのです。「むらの風景は、むらに住んでいる人々の器量を示す」ことをお忘れなく。



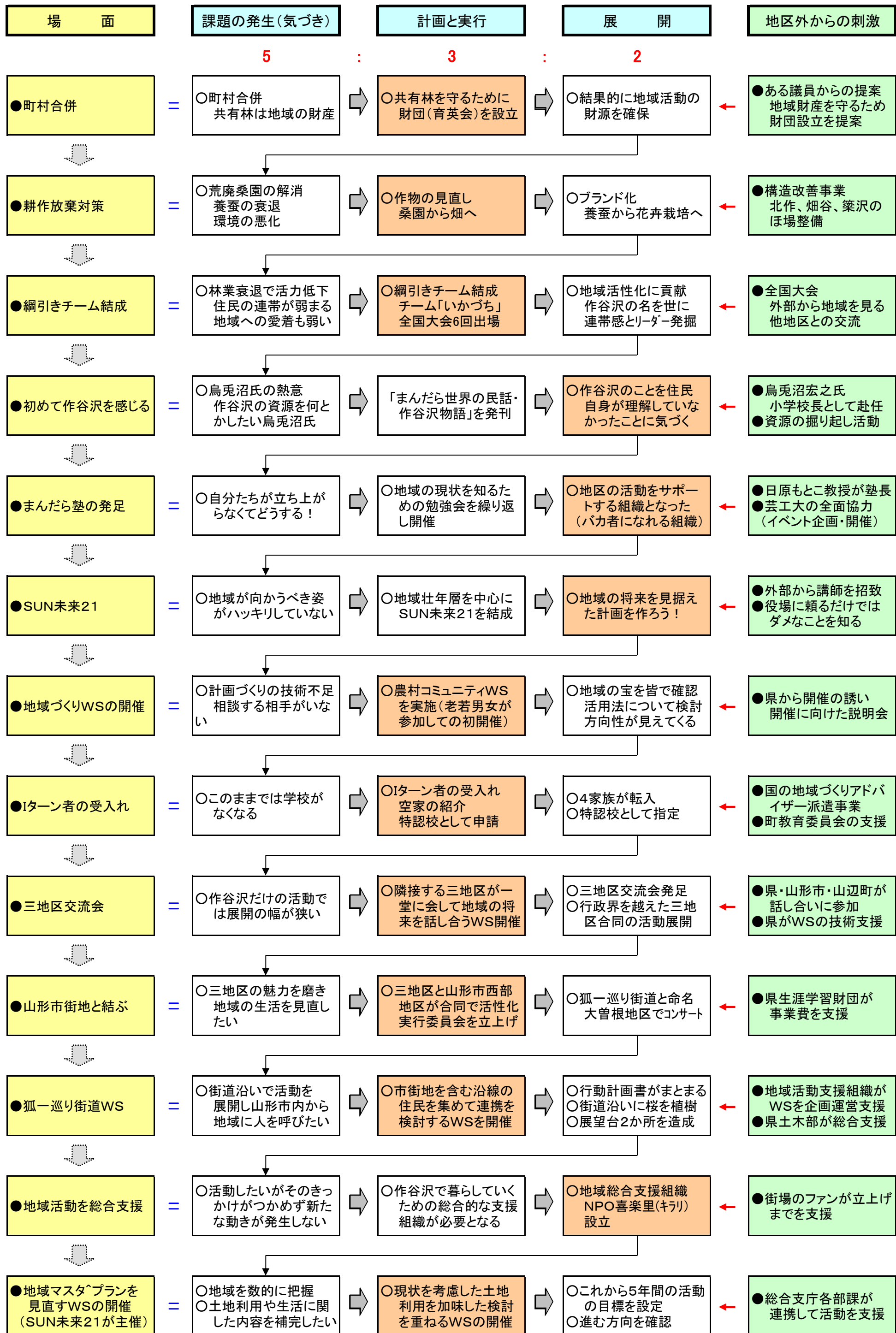


深山地区ロゴマーク

「地区民の共有感」「地区のブランド化」「宣伝効果」を目的に地区民から広く募集し、選考会を経て、平成19年8月に決定。

※デザイン説明：全体の緑色は自然をイメージし、Mは深山のイニシャルを地区から見える頭殿山に、Miyamaのをどんぐりで地区民の笑顔に見立て、下の帯状は清流・実測川を表現、素朴でかわいらしくデザインされています。

作谷沢の発展経緯と外部支援の整理表



地域名：深山

地域の括り検討作業（その1）

step 1 集落構成図を作る

黒鴨		
	深山	高岡
	鮎貝	

step 3 話し合いを進めていくための括りを検討する

1 黒鴨

2 鮎貝

3 深山

4 高岡

※括り単位に名称を添えよう！

地域名：深 山

地域の括り検討作業（診断書）

step2 集落カルテ（構成する集落単位に暮らしの成り立ちを診断）

No	集落名	人材	社会	環境	物資	文情	経配
1	黒鴨	●	●	●	○	●	●
特記事項		・集落としての機能が極端に低下 ・自然景観良好で鮎貝地区の用水源 ・中山間直接支払いも断念					

No	集落名	人材	社会	環境	物資	文情	経配
4	高岡	○	◎	●	○	○	○
特記事項		・少子高齢化が急速に進行 ・獣害が拡大し農家の意欲が低下 ・地域の連携が強い地区					

No	集落名	人材	社会	環境	物資	文情	経配
2	鮎貝	○	◎	◎	○	◎	○
特記事項		・旧村の中心地で住環境も良好 ・道路鉄道などの便も良い ・比較的平坦で農産業振興地域					

No	集落名	人材	社会	環境	物資	文情	経配
		○	○	○	○	○	○
特記事項							

No	集落名	人材	社会	環境	物資	文情	経配
3	深山	○	◎	○	◎	◎	◎
特記事項		・結による農作業が残る地域 ・観音堂、和紙、農家民宿が存在 ・のどかな風景を守る郷					

No	集落名	人材	社会	環境	物資	文情	経配
		○	○	○	○	○	○
特記事項							

①人材：地域を構成するための人が存在する

②社会：社会集団に属しコミュニティが存在する

③環境：衛生・安全・利便・快適環境が存在する

④物資：物・エネルギーが供給可能である

⑤文情：文化や情報があり必要なら取り込める環境である

⑥経済：交換・再配分・互酬のシステムが存在する

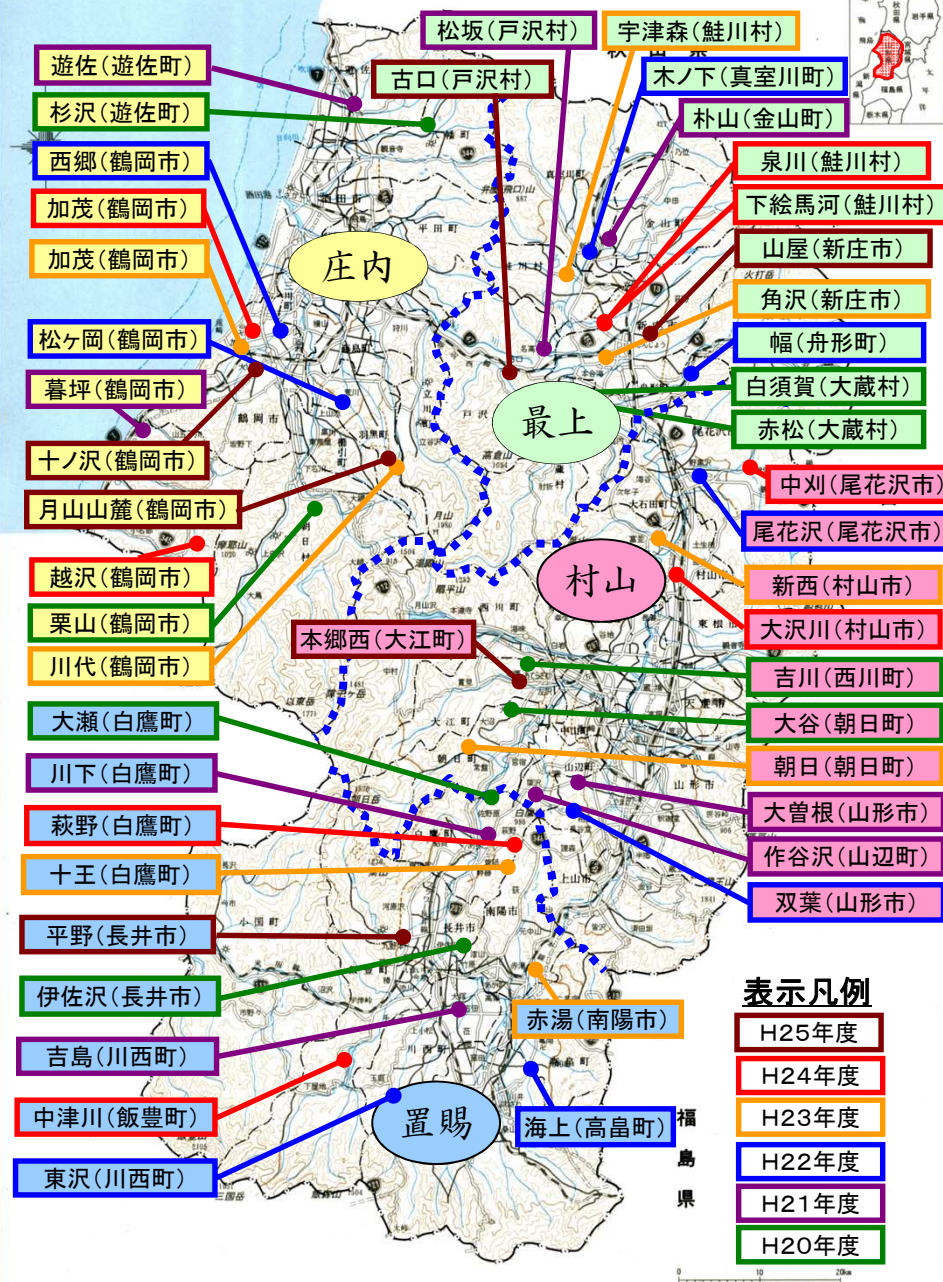
【表示方法について】

今後とも問題ない◎

弱まりつつある○

失った or 失いつつある●

支援地区位置図（１）



支援地区位置図（２）

